

竜楽のおじやまします!



三遊亭竜楽 落語家

さんゆうてい・りゅうらく 1982年中央大学法学部卒。85年に三遊亭円楽に入門、93年真打昇進。日本放送作家協会会員。中央大学では、学員講師として各地で講演を行う。

講義も話芸



矢島正見教授

やじま・まさみ 1948年(昭和23年)生まれ。中央大学大学院文学研究科博士課程単位取得。専門は「少年非行」「青少年問題」「セクシュアリティ」。現在大学院で「社会病理学」を担当されている。

三遊亭竜楽師匠(以下竜楽)：初めにいつもお聞きするんですが、中央大学との関わりみたいなことを簡単をお願いします。

矢島正見教授(以下矢島)：私は中央大学の出身なんですよ。当時で言いますと、中央大学文学部哲学科社会学専攻。S.46年3月卒業、ということで。よく言われるところの学園紛争の頃です。バリケードやロックアウトが続いて3年の終わりにやっと正常に戻って、すぐ4年生。卒業論文で何を書こうかということになったんです。当時、新宿にフーテンというのがいたんですね。和製ヒッピーみたいな感じの。それでそのフーテンを研究しようということで、フーテンと一緒に行動を共にして、その生態と意識、考え方といったようなのを調査して、「フーテンというのは流行現象では決してないんだ。いま若い人たちが持つ考え方の最先端といえるのがフーテンなんだ。従って、あと10年後、20年後は若い人たちの主流派がフーテンのような意識にな

るはずである」といったような卒業論文を書いたんです。

それを私の指導教授の那須先生がえらく気に入ってくださいますよ、大学院に残ったんです。その後、32の時から10年間大正大学にご厄介になり、今から10年前に中大に戻ったんです。

トランスジェンダー?

竜楽：なるほど。ところで、先日、矢島先生の知り合いの方で、女装して授業を行う先生がいらっしゃるという話を聞いたんですが、本当ですか？

矢島：はい。これも話が長くなるんですけど、よろしいですか。

竜楽：どうぞお願いします。

矢島：実は私が研究しているのは、青少年問題だとか少年非行が中心なんです。ところがある時ゼミをやることになって、みんなで合同で何か調査をしようと希望をとったら「同

性愛の調査」というのが圧倒的多数で決まってしまったんです。私はやったことなかったし…。

竜楽：メンバーは、男性？ 女性もいるんですか？

矢島：女6、男3、女性の方がこういうのに興味を持つんですね。

竜楽：女性が調査したい同性愛というのはどちらの方ですか？

矢島：ゲイ、男性同士ですね。それで調査をやり出したのがきっかけで、男性同性愛者のライフヒストリーをずっと追っていったということです。

この調査で毎年1冊の報告書を出して、7年目でだいたい完了しました。

そうこうしているうちに、大学院生の中でもセクシュアリティをテーマに研究したいというような人が育ち、それで話し合ったら「先生、今度は性同一性障害をやりたい」という。つまり一般に言われているトランスジェンダーです。トランスジェンダーというのは、自分は戸籍にしる肉体にしる男であるにもかかわらず、なんて言いますか、心というか頭というか、それが「あたし女よ」というふうになるわけ。たとえば男が好きであったとしても、それは男として男が好きなんじゃなくて、「私は女だから好きになって」というような感じ。だから相手の男性が自分のことを男と思って愛してくれちゃ困るわけです。

この研究をはじめて今年で3年目になります。最初の1年間準備期間として情報を集め、トランスジェンダーの会や集会場に行ってみて、どういう雰囲気かを確かめ、それで本格的な調査に踏み出したんです。この調査に踏み出した時に、いろいろと面倒をみてくれた、お世話になった人が三橋順子さんという人だったんです。その人は全くのトランスジェンダーというわけではないんですけども、やっぱり女装していい気持ちという…。

竜楽：男性ですか。

矢島：そうです、男性です。その人と意気投合して、トランスジェンダー社会史の会とい

う会を作ったんです。そんなつながりで、私が一昨年、大学から研究期間をいただいた時、講義の blanks を代行してくださる方として、三橋さんをお願いしたら、大学の講義も女装で来て授業してくれたわけです。

竜楽：ずっと通して1年間来て？

矢島：半期の授業でしたから、半期間ずっと女装を通して、最後は和服で来たそうです。

竜楽：普段は男装で授業はしていたわけですよね。

矢島：他の大学で歴史学の講義は男でやって、そのときは三橋順子ではなくて、本名でやっているわけです。

竜楽：女装する時は、人格が変わるんですか。

矢島：変わりますね。

竜楽：授業のやり方も全然違いますか。

矢島：そりゃあ違うでしょう。女として講義しているんですから。僕は一度、彼女の講義をちょっと覗いたんですけど、やっぱり女性チックに話していましたね。

竜楽：ご当人はのびのびやっているんですか？

矢島：おそらくね、男で講義しているよりも彼女には気持ちよかったと思いますよ。

竜楽：我々も女装はしませんけれど、女性を演じますからね、仕事で。

矢島：あれは大変ですよね。こっち向いては「おい、おまえ」なんて言って、あっち向いては女性で話すわけでしょ。

竜楽：実は男性が女性を演じる方がやりやすいんです。普段からよく観察していますから。(笑い)特に落語家は異性に興味がある人ばかりで…。

矢島：演じるといえば、実は僕は小学校の頃、言葉がうまく出てこないで、全然しゃべれなかったんですが、落語調にしゃべってみたら、しゃべれるようになったんですよ。

竜楽：すると芸歴は先生の方がだいぶ上ですね。

矢島：それから話し方自体が落語っぽくなっちゃったんです。矯正教育にロールプレイング

という、役割を演じる技法があるんですが、これは落語家が役割を演じるのと同じなんです。僕の講義というのは、ただ講義をするんじゃないで、途中ではつつあ、くまさんが出てきて会話調になったりするんです。だから僕の会話のルーツは落語なのかもしれません。

学生は神様の時代に

矢島：もちろん師匠もそうですが、私たちも考えてみればものを書くということとしゃべるといって、お金を稼いでいるわけです。大学の先生も本当は落語を勉強して、それでちっとは楽しい授業をしないとイケませんね。これからはお客さんは神様で、学生は神様の時代になりますから。大学教授法なんていうのが、今盛んに叫ばれていますが、どうもそれがIT革命とミックスされて、黒板に書いてマイクを持ってしゃべるような旧態依然の講義の仕方はだめである。これからはビデオを流したりスライドを流したり、それから画面とパソコンとを直結して、そして臨機応変にぱっと写して講義をすると、そんな講義ができないような古い先生は、もはや学生からはばかにされるというような雰囲気があるんです。それはそれでいいだろうと思いますが、やはり最終的な勝負は、大学の先生といえども話術だと思うんです。教壇に立った以上、やはりそれなりのパフォーマンスで、これから90分間お客に対して真剣な芸をするんだという気構えでやらなくちゃいけないと思っています。いくらメカニックに長けていても、話がしどろもどろで何を言っているのか分からないようじゃだめなんです。これからの大学の先生は、落語家に弟子入りして鍛えてもらって、……。

竜楽：そうですね、すごくよくわかります。落語は初めて会ったお客様の気持ちをどうとらえるかという感性の仕事でしょう。できるだけその人に会いにいくとか、メールでなくて電話で声を聞くとかして、そこから何かを感じるというものがないと、授業も落語もす

ごく平凡な内容の薄いものになってしまうような気がします。

矢島：師匠ね、また話と笑いのことなんですけれど、例えば千人に話して笑わせる、それから100人に話して笑わせる。それから十数人にお話する。たった1人というのでは、やはり笑わせ方とか話し方が違ってきますか。

竜楽：そうですね。人数というのはもちろん、関係しますね。少ないとなかなか気分が変わらないし、温まってこない。ただ一番大きいのは人口密度ですね。

矢島：空間の広さと人の数。

竜楽：広ければ広いほどいいというんじゃないと思います。

矢島：ほどよい密度ってあるんでしょうね。それと、例えばコンサート会場みたいな雰囲気を作ってしまう方がいいんです。マイクを持って「のってるか?!」なんて、相手が「のってる!」なんて言ってくれるから、「これから講義だぞ」なんてね。そういうふうにいけばいいですけどね。まばらにポコポコしかない場合は、なんか監視されているみたいな感じなんです。

竜楽：分かります。

矢島：僕は1000人ぐらいと、それから100人ぐらいと、30人ぐらいと、話し方をみんな変えているんです。広い所で大勢の人たちに向かうと声が高くなりますね。それから僕は今でもいろいろな大学で非常勤講師をやっていますが、大学のレベルによって例え話の量が違ってきます。理解力の低いところでは、理論は黒板に1行書くだけで、面白い例え話を使って理解してもらうようにするんです。理論というのはそう面白おかしいものではないから、そういうふうに進めないと授業にならない場合もあるんです。大学の先生も苦労しているんですよ。

竜楽：それは素晴らしい話術ですね。やはり、理解させようという意思と工夫がないと学生の気持ちは離れてしまうんでしょうね。

矢島：離れちゃうし、もうガサガサガサガサしている。

竜楽：ゼミとかになると、学生との個人的なつきあいとか飲み会とかもありますよね。そういうのはいかがですか。

矢島：講義をしてても、うちのゼミ生だとか知っている学生がいると自然にそっちの方に向いてしまいますね。それに、僕は以前からロールプレイング的に授業をして、落語のような言葉を使い、マイクを持って歩きながら話をするんです。その時、例えば「非行」を扱った授業で、ある女子学生2人に「君達は、中学3年生の女の子の役で、2人で万引きをしたとする。君は非常にお嬢さんで、親が教育熱心。もう一人の君は、お父さんがアル中で、お母さんは蒸発していない」なんていう配役で話を進めていきます。すると「私の家は、そんな家庭じゃありません」なんて言われて困ったりすることもありました。(笑い)

竜楽：でも、そうやって授業に参加させるというのは、非常に意義がありますよね。

矢島：そう、参加させるとね。授業が生きてくるんです。

竜楽：それは本当に我々のやっている話術と同じですね。

矢島：それで、その学年が卒業してOB・OG会で会ったときに「先生、私はいつも下町のおきんのつっぱった女の役で、お嬢さん役は、やらせてくれなかった」と言われたんです。ああ気が付かなかったなと思って、顔を見てそういうふうになっちゃたなあと反省したんですけれど(笑い)。

学生とはそんな感じでつきあっていますね。

酒を飲む場は修業の場

竜楽：お酒の話はどうですか。

矢島：そうですね。最近、酒の飲み方に若者の伝統というものがなくなってしまったのは確かですね。昔は先輩が酒の飲み方を教えるという非常にいい伝統があったわけですよ。日本は本当に酒飲みの天国だった。と同時に日本ほど酒の訓練と酒のつきあいのやかまし国はないはずです。それをずっと訓練させて、若いうちにトレーニングを積ませていって、

実社会でちゃんとエチケットとモラルを守って和気あいあいと酒が飲めるような訓練を学生時代にしていたはずなんです。ところが最近、会社のメンバーで酒を飲む機会があったとき、上司が「今日は無礼講でいくぞ」と言ったとします。以前なら「ばかやろう、きょうは無礼講だろう。部長なんて言わないよ、イトウと呼び捨てにするからね」と言いながらも、ちゃんと相手を立てていたんですよ。ところがいまの無礼講は、全くつんぼさじきにして、こっちでワアワア騒いで「まだいたの、お前！」なんて顔をして、真に無礼なんです。

竜楽：最近多いらしいですね。

矢島：実は、この無礼さが学生時代に直されていないんです。例えば、1年生の時に、「先生、コンパをやりましょう」「いいよ、大いにやろう」と言って、1月ぐらいして学生が「先生、コンパをやるって言っていたんですけど、いつやるんですか」という。先生がお膳立てして招集するもんだと思っていたんですよ。これは1年生。2年になると自分たちが企画してやるんだということが分かる。そうすると「先生、何月何日何時からどこここでコンパをやりますから来てください」と1週間ぐらい前にお誘いがあります。そのときの僕は手帳を見て空いていても「だめだ、埋まっている」と言う。この程度が2年生。3年になってやっと「先生、コンパをやりたいんですけど、先生のご都合は、いかがですか」と初めて聞いてくる。やっと話が進むようになります。

竜楽：3年かかってようやく誘い方だけは一人前ですか。

矢島：はい、やっと。もう一つ、酒の飲み方です。これも面白いもので、昔は30人でも一まとまりとして全員で飲めたんです。でも今は7、8人でもグループに分かれてしまう。かつては30人をとりまとめるリーダーがいたし、とりまとめる方向があった。とりまとめられる人たちもそれをちゃんと了解していた。それができなくなったから、しょうがな

いので、10人以上で酒を飲むときは、どうしたらいいかわからないから、盛り上げるために瞬間芸というやつを考えました。それが今から20年前。ところが瞬間芸というやつはそうそう沢山あるわけではないから、1回目はいいですが、2、3回同じ芸をすれば、またやるよっていう感じになってしまいますから、しだいに瞬間芸もすたれて、やるやつもいなくなりました。それで盛り上げるのに何がいいかといったら、一気に飲み。一気に飲みだとちょっと一言口上を知っているやつがいればいいですね。「なにかいいことやってみよ」とか、それであとは無芸。「一気に、一気に」でしょ。もう芸のない落語家だってあんなことはやりませんよ、本当に。そこへいくと昔は芸のないやつだって、歌ぐらい歌えました。それにちょっとした台詞がいれば「東に富士の...、西に...、ここお江戸...そびえたつは我らが母校中央大学」「おー」なんてね。そうすると単なる手拍子と違ってメリハリがつくでしょう、そういうおもしろさがあったんです。

竜楽：それが受け継がれて伝統となった。

矢島：今は伝統が全くない。同年齢で7、8人程度だったらまだ飲めるが、年齢が幅広くなったときの飲み方というのを全く知らない。だから会社に入って来てお前に任せると言えない。もし任せられたら、おつまみ一つだって、どこに飲みに行くかだって、上司は日本酒が好きなのか、ワインや洋酒が好きなのか判断しなければだめ。それで日本酒で飲むんだったら、ふところのさみしい社員もいるし、ちょっと安い所で落ち着けるような所があったらいいなあと選ぶ。選んだら席の配慮、飲み物の注文、とりあえずのビールから、焼酎系か日本酒系を注文する。それとおつまみ。おつまみなんてというのは、絶対にてめえの好みで注文しない。つまり任されたということは、独裁者になってしまう。独裁者になったときは、相手はどんなつまみが欲しいかなというのを考えて、さっと出て来るものを例えば枝豆なんかを3人、あるいは4人に一

つ置いておいて、それで今度はちょっとこんだ物を、それから腹減っているようならボリュームがあるもの、お腹いっぱいだったらあっさり系にして、最後はつけものぐらいで終わらせる。といったような配慮は、今の若者は絶対にできない。それと同時に偉い人には、会計はちょっと余分に払ってもらうから、その時に会計をする。もしここで3人で飲んだときに、平、課長、部長だったとしたら、1：2：4とか、こういうふうにするわけ。例えば2000円、4000円、8000円とする。平だって絶対無料にはしない。やはりプライドがありますからね。トイレ行ったふりして支払って「もう終わりましたから、いくらもらいます」と。

竜楽：落語界では飲み会の仕切りは、前座がやるんですが、これがうまい人は出世も早いですね。

矢島：僕はよく言うんです。人格者とは何か。これ非常に難しい。実は私の専門の社会学というのは、こんな抽象的でわからないことを尺度化して説明するものなんです。「愛とは何か」なんて分かりはしない。「愛している」なんて言っても分かりはしないですよ。それを尺度化するわけです。それで酒の飲み方。1人で酒を飲むこととは、自然を見ながら花鳥風月、雑草を見てその雑草に生命を感じて、それと同時に自分を振り返って、自分自身の人生と対話して、人生の無常を感じて飲むこととなる。それから2人で飲む。このときは愛している異性の人と飲んじゃだめ。例えば私とあなたのように初対面でも2人で、話すことがなくならないようではなければだめ。それも2時間ぐらいいは飲めなくちゃだめ。それから5、6人ぐらいいは和気あいあいと。これは本当に仲のいい仲間同士の絆を結ぶように、気楽に飲めなければいけない。それから30人ぐらいいで、しかも自分が単に受け身でなくて場をとりしきりながら飲めなければだめ。最後の一つは500人、1000人、これはもう半年ぐらいい前から会場を予約して手配して、司会者だとか、フロア受付、それが



らどういう料理を出すか、注文を全部交渉して金額を交渉してということができなくちゃだめ。この5つ、全部飲めたら人格者。

竜楽：めったにいないでしょうね。

矢島：学生に「お前らいくつできる、何個だ？」と聞く。一番危険なのは1個で一人で飲むと答えたやつ。これはアル中になっちゃう。学生は、5、6人、7、8人で和気あいあいというのはできる。あとはみんな絶望的。

竜楽：人のことを気にしないでいい生活しか知らないからでしょうか。

矢島：子どもの頃は気になっていたんでしょう、たぶん。それに疲れてバリアを張ってしまっているんでしょうね。今の教育というのは、実にナンセンスで、勉強はしなくていいとかなんとかいってても、「1年生になったら友達100人できるかな」でしょう。1人もできない子どもというのは人格欠陥子どもと言われているような感じです。「友達と遊べないの？ダメな子どもですね」と先生は言いますから、当然、友達といなくてはならないという強迫観念が生まれてしまう。立身出世しようとしたやつが、立身出世できないと絶望して首をくぐるのと同じですね。友達ができるということがとてもいいことで、自分がそれをできないと、自分はだめな子なんだと思ってしまう。そうなると、だんだん自己表現もできなくなり、活動的でなくなる。小学校5、6年から中学時代にはそういう子どもがバリアを張る。たとえ友達つきあいができる子でも、結局は同年齢の子もしかつきあえな

い。年上や年下とのつきあいが出来なくなると、今度はバリアを張ってしまう。

竜楽：なるほど。

矢島：話を戻しますが、いまの若い人は酒を飲むということをお断りしている。酒を飲む場というのは昔は修行の場だった。いくなれば一人前の社会人というのは何かというと、一人前に酒を飲めることだった。だから

人間関係の根底なわけです。たとえ飲めなくてもお茶でもなんでもいいから、その場でコミュニケーションができなければいけなかった。いくなればそれができないことは今というインターネットができない以上に昔は欠陥人間だったんです。今、酒を飲むというのは100%楽しくなくちゃいけなくなりました。修行だなんて思っていないです。

竜楽：そういう意味では酒を飲むことは落語家にとっても修行だと思います。私の場合、少し修行しすぎてしまっていて...（笑）今は大学の受験勉強のように家にこもって稽古する若い人が多いんですが、それだけでは合格点は取れても突出した芸はできないと思います。

矢島：酒を飲むということは、やはり人生修行なんです。学生も若手落語家も同じです。

竜楽：まったく同感です。意見が一致したところで、お開きとさせていただきたいと思います。今日は、本当に楽しいお話、ありがとうございました。

対談を終えてひと言

今回は矢島先生から話芸の真髄を教えてくださいました。いただいた気がします。「芸のない落語家だってあんなことはやりませんよ」というお言葉。胸にズーンと響きました。他人事とは思えません。さすが同性愛の研究者だけあって、ゲイ道にはキビシーイ！